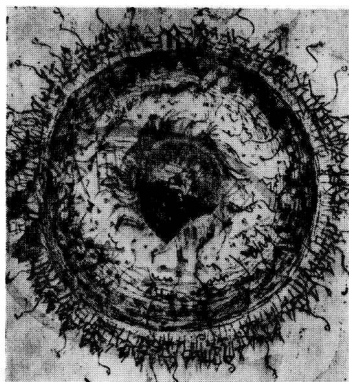


舞踏会の手帖

長谷川修



人文書院

舞踏会の手帖

一九七五年十月十日初版印刷

一九七五年十月十五日初版発行

著者 長谷川修

発行所 人文書院

京都市下京区仏光寺高倉西

発行者 渡辺睦久

印刷 天理時報社

製本 坂井製本所

© Osamu Hasegawa 1975. printed in Japan

目次

舞踏会の手帖

5

宿恋

57

和布刈神事

105

黄金狂時代

175

あとがき

257

舞踏会の手帖

長谷川修創作集

舞踏会の手帖

四十にして惑わず、五十にして天命を知る、という。

私の父は、四十五歳で死んだ。私の家系では、どういふものか、男はあまり長生きしない。過去帳で調べてみると、曾祖父は五十一歳、祖父は六十四歳で死んでいる。いずれも数え年だが、還暦以上に生きたのは、ともかく祖父だけである。

私の子供の頃には、人生五十年、と云われていた。従って私は四十五歳で死んだ父を、そんなに早死したとは思っていなかった。六十一歳で本卦還りした人は、単に官職から身を退いたというより、既に人生から隠居したという感じに見えた。七十歳ともなれば、人生七十古来稀、というわけで、腰が二つ折れに曲っているか、でなければ白鬚を長く垂らし、八十歳と聞くと、率直に云って、あまりに長生きし過ぎているという印象が強く、一体どうしてそんなにヨボヨボになるまで生きられるのか、当人が何だか人間離れのした妖怪じみた存在に見えたし、九十歳の人は、

もはや仙人であつた。

私は二十代で肺結核を患い、あと半年の寿命だと宣告された。当時肺病というのは、ちょうど現在のガンと同じように、一旦その宣告を受けたが最後、既に一巻の終りだという風に考えられていた。この病気で病院に入院した者が、生きて戻ったという話はあまり聞かなかったから、家族の者は私が入院するのを極力反対した。だが、家で寝ていたところで、半年の寿命が短くこそのなれ、長くなるわけはなかった。私は入院し、そのころ肺結核の新しい治療法としてはじめられた胸郭成形術を受けて、肋骨を七本切り取ったが、それは背中を断ち割って肋骨を切り取るという、大変な荒療治だった。しかも局部麻酔だけでやるのだから、手術の一部始終は本人に知覚され、とくに肋骨を鋏でバシッ！と切断するとき、その音が足の爪先にまでビーンとこたえる。麻酔で痛みはそれほど感じないものの、外科医が切り開いた胸郭の内部に手を差し入れて肺臓をかき分けているらしく、その苦しさたるやたとえようもない。私は外科医に、「僕の心はどんな色をしていますか？」と冗談を云おうとしたが、とても口など利けたものではなかった。それも四本以上の肋骨を一時に切除することは出来ないの、七本の肋骨を切り取るには、なか一ヵ月ばかり間を置いて、また二回目の手術を受けねばならない。体力のないものは手術中に死に、そうでなくても手術後に、肺炎でも起せばそれで終りである。そのころこの手術を受けた者で、四人のうち一人は、手術中かその直後に死んでいた。

そういう手術が不治の病と云われた肺病に、果してどれだけ効果があるものか、そう俄かには信用されなかったので、手術を受けた私自身すら、まあ半年と宣告された寿命を、せいぜい一年か二年保たせれば上々だろう、というくらいにしか思っていなかった。

私は切り取られた自分の肋骨を手にとって眺めながら、自身の骨を自分で手に取るのが、何かとても奇異に思え、また幾分滑稽な気もした。当時、私の同年配の男といえ、戦場で死んだ者が多かった。普通なら私の体は戦場で焼かれ、この骨は白木の箱に納められるところである。私は小さな壺に骨を納めた。振ってみるとコトコト音がして、ああ、これが俺の骨の音か、とその音を聴いていた。そして、どう間違っても三十歳までは生きられないのだと思っていた。

三十歳では一応回復して、もはや自分がかつて肺病であったことなど忘れていくくらいになっていた。それでも内心では、四十歳までは生きないだろう、かりに四十歳まで生きるにしても、父の死んだ四十五歳まではとても無理で、せいぜい生き延びるとして、まずその年齢が限度だ、と思っていたのである。しかし私は四十歳を越し、それから四十五歳も過ぎて、現在ではもう、父の寿命を上廻ってしまった。

四十五歳ごろから、私は急に目の衰えを意識するようになった。それまで視力だけは絶対大丈夫だと思っていたが、そのころから新聞の字が読みづらくなり、辞書などの細字は、もう全然読めなくなった。父の年齢を境に、老眼に突入したのである。しかし、近くのものが見づらくなっ

た代りに、遠くのものは以前よりよく見えるようになった気がする。

私は敢えて老眼鏡を求めなかった。父より余計に生きている以上、眼鏡まで掛けて現実につき合うことはない。近くのものが見えなければ、そんなものは見るな、ということだろう。むしろ私たちはあまり細部を見過ぎるために、かえって遠くを見誤ってしまう。遠くさえ見えれば、それで結構ではないか。近くのものが見えなくなったということは、それだけ私にとっては幸いである。少くとも私の判断力は、近くの細部が見えていたときよりも間違わなくなる筈だから。

そんなわけで、私は老眼鏡を求めない。尤も細字が読めなくなったと云いながら、その実、関心を持つ本などは、いくら小さな活字でも、ちゃんと眼鏡なしに読んでいたのである。つまり、私の目は得手勝手で、見たいものだけを見、見たくないものは見たがらないのだ。そのお蔭で、見るということが、以前とは違った形のものになった。それも見るのではなく、ただじっと睨んでいるのだ。するとこれまで全く気づかなかったようなことが、不意にわかって来たりする。こんなことなら、もう少し早くから老眼になればよかった、とさえ思うくらいなのである。

私は現在四十七歳で、昔流の数え方では四十八歳、父の年齢を既に三年近く上廻っている。父が死んだとき、私は数え年六歳だったから、父の思い出はあまりない。

晩年の父、といっても四十四、五歳ごろの父は、一体どんなことに興味を持っていたのか、私はよくそのことを考える。父の興味が、私にもわかる年齢になったと思うからだ。しかし、現在

となつては、それも殆ど知りようがない。

ただ私のかすかな記憶では、父は船の銅鑼どらをいくつか、部屋の壁に吊るしていた。そのうちの一つは、半間の壁に余るほど大きなもので、まわりに火災のような飾りが取り巻き、緑青の吹き出た表面には、龍の模様が浮き出していた。何でも支那の船の銅鑼なのだそうで、かなり値打ちのあるものだということであつたが、私の憶えているのはただ龍の模様のある大銅鑼だけで、それらの銅鑼は父の死後、誰かがみんな持つて行つてしまつた。

銅鑼のほかに、父は船金庫も二、三集めていた。船金庫とは、四、五十糧立方くらいの木製の手箱で、縁に黒い鉄の金具が取りつけてあり、扉を開けると、内に抽斗が沢山ある。抽斗は全部鍵が掛かるようになってゐるが、更に抽斗の奥には、巧妙に細工された隠し抽斗も仕つらえてある。軽い桐材で作られており、船が難破したとき、千石船の船頭はそれを海中に投げ込むのである。

そういう船金庫の知識は、私が最近になつて得たものだ。稚い時分の私は、無論それが船金庫だとは知る由もなく、ただ抽斗の沢山ある手箱だと思つて見ていたし、事実父は時々扉を開けて、鍵の掛かる抽斗の中からいろんなものを出し入れしていた。

銅鑼といい、船金庫といい、それらは船に係のあるものだ。父は海には全然関係のない生活をしていたが、一体なぜ、そんな銅鑼とか船金庫とかいうようなものに、関心を持っていたので

あろうか？

銅鑼は船が出帆するときに打ち鳴らされるものだ。父にはひょっとして、誰か別れ難い人と波止場で別れたというような、愛別離苦の思い出でもあったのだろうか。しかしそういう感傷は、父の胸の中にそっとして置いてやるとして、私が興味を持つのは、銅鑼よりも、むしろ船金庫の方である。

私の家では、大事な書類や物品を保管しておく戸棚は別の場所に仕つらえてあり、父の部屋の床の間に置かれていた船金庫は、単に父が趣味で集めた骨董品に過ぎず、父がその中にいろんな物を仕舞い込んでいたとしても、父の身の廻りの物品、ないしは父の興味を惹いたごく些細な品だったに違いない。例えば、片方を失くしてしまったカフス釦とか、記念のメダル、新聞の切り抜き、古びた手帖、それから道傍でふと目をとめて拾って来た小石とか……。要するに、それらのこまごました物品は、他人には全く価値がなく、ただ父個人にとって何らかの愛着が籠っている、といった種類のものである。私が是非見たいと思うのは、そういうこまごまとしたものなのだ。

父の死後、家にかんがりの負債が累積していたことが判明し、加えて父が生前保証に印をついていた厄介な問題もからんで来て、結局私たちの一家は郷里の財産をすべて整理し、近くの街に出て住むことになった。尤も実際に街へ引き移ったのは、父が死んでから数年目で、私が九歳のと

きだった。父の三周忌の法事を済ませたあと、私たちは父祖伝来の家を引き払ったのである。その際、古びた家財は全部整理してしまつたから、私は以後、ついぞ船金庫を見掛けたこともなかったし、またそんなものなど思い出してみたこともなかった。

しかし、父の死亡年齢を過ぎた現在^{いま}になつて、何となく私は船金庫のことが氣になるのだ。父が死んだのは昭和六年だったから、もう四十年以上の歳月が流れている。その四十年以上の昔に、父が私とほぼ同じ年齢で、どんなものを船金庫の中に納めていたのか。とりわけ隠し抽斗の奥に、一体何を隠していたか。私は隠し抽斗の奥でコトコトかすかな音を立てている父の骨の一片を想い浮かべているのである。

出来れば私も父と同じく、そんな船金庫を、手許に一つ置いてみたいと思う。現在の私なら、その抽斗の中に何を入れるだろう？ とくに秘密の隠し抽斗には、一体どんなものを仕舞い込むか？

私は街を歩いていて、通りすがりに骨董屋を見つけたりと、店先で足をとめ、かつて父の部屋で見掛けたと同じようなものが、店の中に見つかりはしないかと目を走らせる。が、これまで骨董屋の店先に、ついぞそれらしいものを見掛けたことはなかった。店の中に入って直接主人に、船金庫が欲しいのだがと頼み込めば、あるいは何処からか捜し出して来てくれるかもしれない。だが、敢えてそんなにしてまで、手に入れようとは思わない。何処かのさびれた裏通りを歩

いていて、ふと見掛けた骨董屋の店の隅に、埃をかぶってひっそりと置かれているのを、私の目で見つけ出したいのだ。埃だらけのガラクタの片隅に、父が船金庫の姿をしてそっと隠れているのを、見つけ出したいのである。

ある日私は納屋に入ったついでに、あれでもと思つて奥の方を調べてみた。会席膳や椀などの什器類を入れた箱が積み上げてある下に、金具のついた古びた箱がある。金具の工合から見ても、その黒ずんだ箱が、どうやらそれらしいのだ。しめた！ と私は早速什器類の箱を取りのけて、底の方の箱を引き出してみた。

しかし、折角苦心して取り出してはみたものの、それはただの箱でしかなかった。金具のついた頑丈な箱だが、蓋を開けてみると、中に錦手の大皿が重ねて入れてあり、そのほか青磁の花器や香炉などが、ボロ布に包まれて入れてある。そしてその隙間に、どういうわけか十冊ばかり本が詰め込まれていた。

それらの本は、私が中学の時分に使っていた岩波の国語とか、博物、化学、公民、といった教科書である。それに高校の時のドイツ語の教科書なども混っている。そして中に一冊、ノートがまぎれ込んでいた。表紙に私の筆蹟で「積分学」と書いた、高校時代のノートである。

それらの本やノートは、黴臭い匂いがし、湿気で頁がピッタリとくっついて、引き剥がすとバリバリ音がする。一枚一枚頁を引き剥がして行くと、くっついてる頁の間から、そこに長いこと